

# Hebben + 不定詞連鎖にみる構文の不確定性(3)

猪 股 謙 二

## 0. はじめに

これまで『英米文学論叢』第33号(2002)111-141, 第34号(2003)41-59に連載しオランダ語のHebben + 不定詞構文の特徴を様々の視点から考察してきた。本稿では hebben + 不定詞構文のなかで直接議論の対象にしてこなかった hebben + te 標識無し構文を検討しこれまで2回にわたり議論してきた内容をまとめながらこの hebben 構文の特徴を総合的に考察する。

## 1. 不定詞構文をとる動詞類と義務的連鎖群

オランダ語において複数の動詞が連続して生起する現象は普通にみられるものであり、英語、ドイツ語、フランス語に較べてみても際立った特徴を成しているといえる。その典型的な例は、複数の動詞が serial dependency をなす構文である。この動詞の連続には、意味上の主動詞、即ち、文の基本的な意味内容の決定を支配する動詞の他に、完了、アスペクト、認知・知覚、ムード・モダリティーを表す動詞がそれぞれが連続して生起することもある。更には現代英語では特定の方言を除いてはあり得ない同一範疇の動詞、例えばムードを表す法動詞が連続して生起

することもある。このように多様な動詞が織り成す連鎖のなかで特に hebben の立ち振る舞いは一層際立った特徴があり如何なる理論的な枠組みに依拠する場合でも注意する必要がある。

不定詞をとる動詞は hebben だけではなくその他にも沢山の動詞が不定詞をとることがある。しかしこの hebben + 不定詞連鎖の場合は、他の動詞と異なり不定詞標識 te の有無に左右されることなく hebben の語義はほぼ一定しているとしてよい。例えば、次の(1)から(7)の文を考えてみよう。(1)は不定詞標識 te 付きの文、(2)は te 無しの文。(3)から(7)の各組では a は不定詞標識 te 付きで b は標識無しの文である。(1)(2)と(3) horen (4) zien (5) komen (6) zijn (7) vinden の文を比較してみると不定詞標識の有無によりその動詞の語義が明らかに異なっていることがわかる。<sup>1</sup>

- (1) a. Zij hebben niet genoeg te eten. 「彼らには食べるに十分なものがない」  
 b. Ik heb niet veel te doen. 「私には成すべき多くのことがあるわけではない」
- (2) a. Hij heeft een zuster in Amsterdam wonen. 「彼にはアムステルダムに住んでいる姉妹がいる」  
 b. Ik heb de was nog buiten hangen. 「私はまだ外に洗濯物を乾したままにしている」
- (3) a. Je hoort op tijd te zijn. 「時間には正確であるべきです」  
 b. Ik hoor hem praten. 「私は彼が話しているのが聞こえる」
- (4) a. Ik zal zien het boek te krijgen. 「私はその本を入手しようと思う」  
 b. Ik zie haar staan. 「私は彼女が立っているのが見える」
- (5) a. De cursus komt te vervallen. 「そのコースは中止になる」

<sup>1</sup> Cf. A.M.Fontein en A. Pescher-ter Meer, *Nederlandse Grammatica voor Anderstaligen*. (Utrecht: Nederlands Centrum Buitenlanders 1994) pp.82-84. Cf. G.Geerts, et al., *Algemene Nederlandse Spraakkunst*. (Groningen: Wolters-Noordhoff 1984) pp.571-572.

- b. Wij komen bij je eten. 「私達はあなたの所に行って食べます」
- (6) a. Brand is door voorzichtigheid met vuur te voorkomen. 「火事は火の扱いに充分注意することで防げる」
- b. Hij is koffie halen. 「彼はコーヒーを取りに行った」
- (7) a. Wij vinden zijn optreden niet te accepteren. 「私達は彼の振る舞いを容認することはない」
- b. Ik vind haar mooi zingen. Ik vind die ketting niet bij die jurk passen. 「彼女は素敵に歌うでしょうが、その首飾りはそのドレスには似合わないと思う」

(1)と(2)の hebben の語義はほぼ同一といってよいが、これと同じ位置に生起している動詞は、(3) a horen = hehoren 「義務」、(4) a zien = proberen 「試行」、(5) a komen = een punt bereiken 「状態の変化」、(6) a zijn = mogelijkheid 「可能性」、(7) a het geven van een mening over iets passiefs 「何か認知されることについての意見の表明」となっている。この(3)から(7)の一組になっている文の b では動詞と標識の付かない不定詞の意味内容はいわば化合されたひとつの概念を構成しているのに対して、標識 te 付きの文の a では動詞と不定詞の意味内容は化合されているとはいってもいまだふたつの異なる概念が合体されたふたつの部分から成る意味概念を構成していると言い換えてもよい。しかし、この(3)から(7)までのように動詞の意味の違いが他の同義語で置換可能なほどに明瞭である場合はそれほど大きな問題はない。一方、例えば標識 te の有無による意味上の違いをそれほど生じない heplen や leren の場合は、この標識の有無が如何なる意味をもたらしてくれるか識別できなくなり分析上困難に陥ってしまう。事実、heplen, leren は補助部として te 標識の有無に関係なく不定詞をとることができる。従ってこの標識の有無を拠り所にした意味の違いを追求することができなくなってしまうのである。しかし、この

問題を考えるときの有効な手段が系統的に近いドイツ語にはみられない方法がオランダ語にはある。それは、オランダ語に特有な(従属節中は特に顕著な)「連続依存関係」(serial dependency)にある動詞群の生起可能性である。オランダ語の文末で連続依存関係を保持しながら生起する連鎖状の動詞群は活用変化することなく不定詞のままで他の構成要素の介入を許さない(一定のドイツ語にない順序で)ひとつの動詞に固まった「義務的連鎖群」を形成することがある。<sup>2</sup> この連鎖群は、主要部としての動詞とその補助部から成りかつその補助部が複数の動詞によって構成されている場合に、その補助部の動詞群をひとつの構成要素にまとめて文末に現れる「連鎖構造」(opeenvolgend groepverband)である。この「義務的連鎖群」は動詞主要部と補助部を決定する統語論と意味論のparallelismに頼るだけで扱えるほど単純な問題ではなく一筋縄では行かない複雑な問題である。ここでの当面の問題との関連で大切なことは、この連鎖群は意味上ひとつの概念になり得る動詞群であり文中での他の構成要素とは一応は一線を画する程の自立性を内在化している動詞連鎖である。換言するならば、個々の動詞要素が個々の語義を保持しながらも上手く融合しあってチームワークをとりつつひとつの大きな動詞群にまとまった単位である。この文末に現れる動詞連鎖は、類型論的

---

<sup>2</sup> Cf. G.Geerts, et al., op.cit. p.531.: Zoals gezegd noemen we een werkwoord groepsvormend als de werkwoordelijke eindgroep waar het in een zin met achter-pv deel van uitmaakt, ondoordringbaar is, dat wil zeggen dat er geen elementen tussen de samenstellende delen van die eindgroep geplaatst kunnen worden: ... 「ある動詞が文末で定形そして他の動詞を率いて連鎖を成し、その連鎖中に他の要素の介入を許さない動詞群を形成しているとき、その動詞はグループを形成していると呼ばれる」。この場合の「グループを形成している」(groepvormend)と動詞連鎖と「義務的連鎖群」(verplicht opeenvolgend groepverband)は厳密には同じ概念ではないが同じ様な考え方にもとづいている。ここでは「義務的連鎖群」とは「義務的に定形を先頭とする文末の連鎖群」を指し主節には現れない動詞の連鎖群である。

からすればSOVの言語であればよく知られた動詞要素のincorporationとも考えられるが、オランダ語の場合にはこの「義務的連鎖群」はとりわけ他のゲルマン諸語にない高度な規則性を秘めた特徴を備えているように思われる。そこでここでの議論で注目すべきはある動詞群が連続しているように見える場合でも義務的連鎖群を形成することができなければ、その連鎖はひとつの概念を構成するような意味上の化合があるとは言えないことである。即ち動詞の連鎖が統語的に自立した連鎖構造を形成できなければ動詞群の意味の化合が織り成す複合概念は生じ難くなると考えられる。この意味上の統一的複合概念を形成できないときは、大体において、形態論的諸規則を抑制して文末に不定詞群から成るひとつの動詞連続体を形成することはできないとも言える。一見して安定した団塊に見える動詞群であっても「連鎖構造」を形成できない場合にはこの連鎖はこの「連鎖構造」を成す「義務的動詞群」が創り上げる意味内容を持っているとは言えない。従って、次のように不定詞標識の有無に関わりなく補文をとる *helpen, leren* であっても「義務的連鎖群」を形成できる時とそうでない時では連鎖群が創り上げる意味には大きな違いがある。次の例文を考えてみよう。この例文の文法性の判断はすべて G.Geert *et al.* (1984) に依るものである。

- (8) a. *Ik help de cadeautjes inpakken/ in te pakken.* 「私はお土産をパッキングするのを手伝う」  
 b. *Die onderwijzer leert ons nauwkeurig werken/ te werken.* 「あの教師は正確に仕事をするように我々を指導してくれる」
- (9) a. *Ik heb de cadeautjes heplen inpakken.*  
 b. *Ik heb gehoplen (om) de cadeautjes in te pakken.*
- (10) a. *Die onderwijzer heeft ons nauwkeurig leren werken.*  
 b. *Die onderwijzer heeft ons geleerd (om) nauwkeurig te werken.*

- (11) a. Die sportleraar heeft me leren roeien. 「その体育教師は私にロールの漕ぎ方を教えてくれた」  
 b. \*Die sportleraar heeft me geleerd te roeien.

(8)では文末の標識 *te* の有無と意味内容の相違点を識別することはできないが、完了時制の(9)と(10)そして(11)からその違いを見て取ることができる。(9) a ‘helpen inpakken’ と(10) a ‘leren werken’ は、「義務的連鎖群」が形成されているがそれぞれに対応する b ではそのような連鎖群はない。(9) a では「土産のパック詰め」作業自体のお手伝いをしたことになるが、(9) b ではお手伝いをする作業は「土産のパック詰め」とは限らず包装や宛名書きといった作業内容であり得る。(10) a でも同様なことが観察される。即ち、(10) a では教師の指導は「正確な仕事の仕方」自体であるが、(10) b ではこれを達成する為のその他の関連する内容の指導であってよい。この手伝いの内容が「土産のパック詰め」自体だったり、指導の対象が「正確な仕事の仕方」自体という解釈は「義務的連鎖動詞群」が生み出す意味内容であり、手伝いとその対象、指導とその対象はいわば不可分に結合する意味の化合を生み出している。一方、連鎖動詞となっていない場合にはこのような意味の化合はなく、異なる二つの意味の合体に留まっている。このように連続する動詞群の意味上の概念構成上の違いは、動詞と不定詞が「義務的連鎖群」を形成できるか否かによって判別することができる。即ち、意味上しっかりとひとつに化合された内容は連続して生起する動詞群により表現される傾向があるが、一方そうでない化合度の弱い内容は必ずしもそのような傾向を示すとは限らない。一見して同じ様に見える動詞の連鎖であっても意味上の違いがある場合にはその相違点は、恐らく、否、確実に、統語構造に反映されることになる。従って教師の指導内容が明らかに不定詞の内容を直接に指す場合には「義務的連鎖」が形成されていなければならない。(11)のように

体育教師が指導する内容がボートのロールの漕ぎ方自体の場合にはlerenとroeienは「義務的連鎖群」を形成していなければならない、lerenが完了分詞になったり、leren + roeienの連鎖中に標識teが介在することは許されない。

次は教師と指導を受ける子供達の間を描写した文である。

- (12) a. De onderwijzer leert de kinderen lezen, schrijven en rekenen.  
 b. \*De onderwijzer leert de kinderen te lezen, te schrijven en te rekenen.
- (13) a. De kinderen leren van de onderwijzer lezen, schrijven en rekenen.  
 b. \*De kinderen leren van de onderwijzer te lezen, te schrijven en te rekenen.
- (14) a. Maar hij moet ze ook leren stilzitten en luisteren.  
 b. Maar hij moet ze ook leren (om) stil te zitten en te luisteren.
- (15) a. Maar ze moeten ook leren stilzitten en luisteren.  
 b. Maar ze moeten ook leren (om) stil te zitten en te luisteren.

教師の指導内容が読み (lezen) 書き (schrijven) 算盤 (rekenen) の場合には、(12)と(13)の対立からも窺えるように他動詞、自動詞の区別なく「義務的連鎖」が創り上げる意味を表現している筈でありその限りにおいて補助部は標識te無しの文は正しい文法的な文であるが不定詞標識te付きは許されない。しかし教師の指導内容が静粛に着席し(stilzitten)、聴く(luisteren)こと自体のみならず、それに付随する様々な他の指導を含む場合には、(14)と(15)にみるように他動詞、自動詞の区別なく「義務的連鎖」は正しい文の必要条件にはなっていない。これは(14)と(15)では「義務的連鎖」が創り出す意味の化合が生じている場合(静粛な着席と聴くことの指導)とそうでない場合(それ以外の内容を含む指導)の両方の意味が成立する状況が想定できる為に不定詞標識teの付く場合とそうでない場合のふたつの解釈が許されることになる。このようにleren, helpenのように補助部に自由変異形として標識付きと標識無しの不定詞が生起す

ると見える場合でも、実は「義務的連鎖」の有無に応じてその意味内容も違っていることがわかる。従って、*horen, zien, komen, zijn, vinden* のようにこの不定詞標識 *te* の有無によりその語義が明確に違っている例文ばかりではなく、*helpen, leren* のように標識の有無による動詞の語義に明確な差異があるとは言えない場合でも文末の連鎖が「義務的連鎖」を形成しているかどうかに着目することにより構文全体の意味の違いをよく識別することができる。その限りにおいてこの「義務的連鎖群」は動詞連鎖を識別するのに極めて重要な判定基準と言える。

この「義務的連鎖群」の概念は本稿で取りあげている(1)(2)にどのような意味をもたらしてくれるであろうか。G.Geerts *et al.* (1984) に代表される文法書が指摘しているように、*hebben* に後続する不定詞標識 *te* の有無による語義の差異を伴うことなく *hebben* と標識 *te* 付き不定詞(1)と標識無し不定詞(2)に共に「義務的連鎖群」が生じているようにみえる。しかし標識なしの不定詞が生起している文は、伝統的に *apo-koinou* に相当する通常では許されない特殊な文型と考えられる。この点に注意しながら、次の文を考えてみよう。ここでは(16)aと(17)aの単文に対し、従属節中に *hebben + (te)* 不定詞が現れている例文を加えてある。この *hebben* は完了時制を表す助動詞ではないことに注意。

(16) a. *Jij hebt niks te vertellen.* 「あなたが話すことはもうありません(お黙りなさい!)」

b. *Ik zei toch al dat jij niks hebt te vertellen/te vertellen hebt.*

「私はあなたが話すことは何もないともう言ってありますよね」

c. \**Ik zei toch al dat jij hebt niks te vertellen.*

(17) a. *Hij had zijn been op de stoel liggen.* 「彼は椅子に片足を乗せていた」

b. *Ik zag dat hij zijn been op de stoel had liggen/ \*liggen had.*

「私は彼が椅子に足を乗せているのに気付いた」



c. \*Ik zag dat hij had zijn been op de stoel liggen.

d. \*Ik zag dat hij zijn been had op de stoel liggen.

ここで非文法的な文は hebben + (te) 不定詞が連鎖を成していない(16)c, (17)c, (17)dである。(17)bの had + liggen 連鎖は定形動詞 (pv.) を先頭にして不定詞が続く典型的な「義務的連鎖群」を形成しているが、定形動詞が文末にある liggen + had の連続は「義務的連鎖群」とは言えず許されない(脚注2参照)。一方の(16)bの hebt + te vertellen 連鎖では定形動詞の左右に te 付き不定詞が出現することができる。(16)と(17)の両方の文法的な文はこの連鎖に他の要素の介在を許さない点で「義務的連鎖群」を形成しているように見えるが、その連鎖の結合の仕方には大きな違いがある。(17)は標識の無い「義務的連鎖群」を成す構文で定形動詞 had + 不定詞 liggen の順序は固定されているが、(16)では定形動詞の左右に不定詞が現れることができる。この連鎖が持つ自由な語順は、次の例によっても窺い知ることができる。

(18) a. Vader zei dat ze het maar hadden te eten.

b. Vader zei dat ze het maar te eten hadden.

c. Ik geloof dat ze heel wat teleurstellingen heeft te verwerken.

d. Ik geloof dat ze heel wat teleurstellingen te verwerken heeft.

e. Ze zeiden dat hij maar had te bellen.

f. Ze zeiden dat hij maar te bellen had.

既に前号で論じたように、この(16)の構文は話者が聴者に提示する「自分の意思」「制御可能性」「内容の簡潔性」が投影されるモダリティーを含意する文であるから従属節中に現れている例は多くはない。この G.Geerts *et al.* (1984) から引用した文にみられる語順の自由な連鎖から、この標識 te 付き不定詞連鎖群の hebben は複合時制の hebben と同じ語順の自由さがあり、固定された(17)の連鎖よりも助動詞的な性格を備えてい

ると考えられる。即ち、完了時制の助動詞要素の*hebben*や*zijn*と文末で同じ振る舞いをしていると考えられる。従って、*leren*や*helpen*と同様に統語的な振る舞いを根拠にすればこの連鎖群も意味の化合を裏付ける「義務的連鎖群」と認められるものの、ここでは*hebben*自体の語義が不明瞭である為にひとつの意味概念を特定することができない。従って、意味の化合の存在自体も明らかではない。その原因は次節で述べる*hebben*の語義の不明瞭さに在ると思われる。

一方の(2)や(17)ではこの動詞連鎖はどのように考えられるであろうか。西洋文法論の伝統では破格構文*apo-koinou*と認められながらも文法的であるとされたうえで厳しい制約が課される文である。G.Geerts *et al.* (1984)はこの構文の統語構造を提示してはいないが一応不定詞付き対格構文のように考えて*hebben* + NP + [場所・状態の付加語 + infinitive]の文節を想定し、NPを*hebben*の目的語であり不定詞の含意された主語 (*geimpliceerd onderwerp van de infinitief*)と分析している。更にはこの構文は未完了時制 (*onvoltooide tijden*)だけに限定されたものであり、付加語と不定詞の連鎖が複合動詞*uithangen*「外に下げてある」、*klaarstaan*「準備してある」等と交替することもあると説明している。しかし、この*hebben*を英語の「場所 (locative) の*hebben*構文」と同じ様に解釈し*Ik heb wat geld bij me/ I have some money with me*と同じ構成素構造*hebben* + [NP + 場所・状態の補助語]を想定することも可能な分析法であろう。<sup>3</sup>この二つの考え方のどちらがより望ましい分析であるかは更に検討を要する問題である。ここではこの二つの考え方の基本的な相違点を明確にするにとどめる。次の例を検討しながら考えてみよう。

<sup>3</sup> Cf. A.M.Duinhoven (1985).

- (19) a. Je hebt je haar in de war zitten. 「あなたの髪が絡まったままになっている」  
 b. Op feestdagen hebben zij altijd de vlag uithangen. 「祝祭日にはいつも国旗を戸外に掲げる」  
 c. We hebben het eten klaarstaan. 「食事の準備が整っている」  
 d. Die boer heeft op dat weiland drie koeien lopen. 「三頭の牛を牧場放し飼いにしている」  
 e. Ik heb daar vrienden wonen. 「友人達がそこに住んでいる」
- (20) a. Jan heeft het werk klaar. 「仕事が出来ました」  
 b. Jan heeft het koud. 「Jan は寒いと感じている」  
 c. Hij heeft de handen vrij. 「手が空いている」  
 d. Ik heb het boek nodig. 「その本が必要です」

G.Geerts *et al.* 説では(19)の *in de war zitten*, *uithagen*, *klaarstaan*, *op dat weiland lopen*, *daar wonen* を不定詞とその補助語とし *hebben + NP* に対して何らかの文法関係を持っている連鎖と考えている。一方の代案では, *NP* (*je haar*) + *PP* (*in de war (zitten)*), *NP* (*de vlag*) + *Part.* (*uit (hangen)*), *NP* (*het eten*) + *AP* (*klaar (staan)*), *NP* (*drie koeien*) + *PP* (*op dat weiland (lopen)*), *NP* (*vrienden*) + *Part.* (*daar (wonen)*) と構成素分析し, *NP* とその補助部の全体が *hebben* と文法関係を持っていることになる。この分析の特徴は, 文末の標識無し不定詞の扱いが G.Geerts *et al* と大きく異なりここに出現する不定詞は特定の意味の動詞に限定されていることに注目して叙述的付加語 (*bepaling van gesteldheid, predicative adjunct*) とみなし先行する *PP*, *Part*, *AP* 等の様態を補足する不定詞としている点である。従って, この帰結として *in de war zitten* 「絡まっている」, *uit hangen* 「外に下がっている」, *klaar staan* 「準備ができています」, *op dat weiland lopen* 「牧場を歩いている」, *daar wonen* 「そこに住んでいる」の連鎖は, いずれも

が先行する NP の様態叙述という同類の文法機能を担っていると分析していることになる。更には(20) a の *het werk* [ *kraak (zijn)* ] 「仕事が出来上がっている」の中の NP (*het werk*) と AP (*kraak (zijn)*) 連鎖間にみられる文法関係を(19)の NP と PP/Part/ AP/ PP 間に見出していることになる。<sup>4</sup>

しかし、この(19)の構文の不定詞は *hebben* の意味的な補佐役に過ぎないという点をどのように理解すべきであろうか。これと同じ動詞が不定詞として現れている(21)を検討してみよう。次の文中の *staan* 「立つ」、*zitten* 「座る」、*lopen* 「歩く」、*liggen* 「ある・位置している」は、主語が *zingen* 「歌をうたう」、*lezen* 「読書をする」、*zeuren* 「不満を溢す」、*uitrusten* 「休養する」ときの様態を叙述し持続や反復を表す広義のアスペクト動詞である。

- (21) a. *Zij gaat een liedje staan zingen.* 「彼女は立って歌をうたいます」  
 b. *Hij wil nog even zitten lezen.* 「彼はまだ座って読書をしていたい」  
 c. *Hij bleef maar lopen zeuren.* 「彼はちょっと不平不満を溢しまわっている」  
 d. *Je kunt in bed lekker liggen uitrusten.* 「ベッドで横になってゆっくり休むことができます」

この文では *zingen*, *lezen*, *zeuren*, *uitrusten* が文の項構造 (*argument structure*) を決定しているので *staan*, *zitten*, *lopen*, *liggen* は文の基本的な

---

<sup>4</sup> この *hebben* に続く *klaar* は叙述的付加語であり複合動詞 *klaarhebben* ではないことに注意。

i. *Voor het feest hebben we alles klaar.* ‘we have everything ready for the party.’

ii. *Voor het feest houden we alles klaar.* ‘we keep everything ready for the party.’

*klaarhouden* は *klaarkrijgen*, *klaarleggen*, *klaarmaken*, *klaarzetten* 等の同じ複合動詞である。Van Dale の辞書には *klaarhebben* の語彙エントリーはない。

意味に関与することなく純然たる様態のアスペクト動詞の範疇にきちんとおさまっている。しかし、(19)では *hebben* が文の項構造を決定していると言いきれずアスペクト動詞の応援を受けて様態に関わる意味を補足しながら文意を成立させているのであるから(19)の *zitten, hangen, staan, lopen, wonen* は純然たるアスペクト動詞とは言えない。従って、*hebben* が基本的な文の意味を支配できていない為に本来は項構造に関与しないアスペクト動詞の応援を必要としているのである。しかし、このアスペクト動詞も直接項構造に関与する訳ではないので意味決定上補佐役に留まっていることになる。ここでの著者の代案では、この点を考慮し *Je [ hebt [ je haar ] [ in de war [ zitten ] ]* のようにこの構文を「場所の *hebben* 構文」と分析し *G.Geerts et al.* への代案として提示しているのである。この考え方には、統語論と語彙論の相互関係、描写の二次的述語の問題、「所有」構文との関連等の課題は残っているものの現代英語にはない(20)と(19)を同じ様に扱えるという利点はある。<sup>5</sup>

それでは(17)はこれまでの「義務的連鎖群」との関係でどのように考えられるであろうか。この *hebben* + 標識 *te* 無し不定詞の不定詞として生起する動詞類は極端に限られた意味を表す自動詞に限定されて、先行するNPの状態を叙述するPPやAPの叙述機能を補足的に叙述する為だけに現れることを考慮すると、統語論で扱う「義務的連鎖群」とするよりも *hebben* + NP + Locative 構文との関連で問題にされる叙述機能の付加詞と考えるべきであろう。従って、不定詞標識 *te* 付き構文と同様 *hebben* と不定詞の間に意味の化合を裏付けるような「義務的連鎖群」が生じて

<sup>5</sup> *G.Scheurweghs* の次の例では、*have* が叙述語NPをとっているが場所の *have* 構文とは言えない。

i. He would like to have a son a sculptor.

Cf. *G.Scheurweghs, Present-Day English Syntax.* (London: Longman 1959) p.27.

いるとは言えない。この hebben が今なお多少なりとも「所有」の意味を保持している限りは、6つの動詞 *zitten, liggen, staan, hangen, lopen, wonen* は PP, AP, Prt だけでは十分に具現しきれない NP の様態を二次的に叙述する付加語の地歩を抜け出すことはできないと思われる。この構文の不定詞はこの6つの動詞に制限されている点で hebben と不定詞は固定した表現 (*vaste combinatie*) と言える。一方、不定詞標識 *te* 付きの場合は行為・行動を表す動詞であればよくこのような動詞類の制限は無く相対的にみれば自立的な表現であるといえる。

## 2. hebben の語義と文法化の問題

前節(2)の hebben 不定詞構文は現代アメリカ英語の口語的 *substandard* である所謂 *Parataxis* を特徴とする *Syntactic Amalgamation* と分析される構文とも異なる。<sup>6</sup>

(2) a. I have a friend from Chicago's gonna meet me downstairs.

b. I have a friend of mine in the history department teaches two courses per semester.

(2)の不定詞構文はこれ自体で完全に文法的な文であるのに対して、(21)は一定の条件のもとで許容される文である。例えば、一人称主語制約、*have* に後続する目的語名詞句は語用論的に新たに導入される不定句 (*indefiniteness*) でなければならないという制約が指摘されている。しかし、(2)の構文はそのような制約下にある文ではないし一定の条件のもとで許容される周辺的な文でもない。現代オランダ語の文法規則に何ら抵触するところのない正常な普通の文である。従って、*hebben* に後続する

<sup>6</sup> Cf. Knud Lambrecht (1988).

不定詞の統語構造は表面的には(21)と同じ様にParataxisを持つと考えられる限り接続要素をもたずに並置された構造を説明する再分析(reanalysis)を想定しなければならないことになる。この再分析の操作を必要とすることは、この不定詞構文は祖型的な統語構造をしているというよりも解釈上の曖昧性を許す結合度の緩い連鎖を形成しているとも考えられる。これに関する事情は、既に拙論(2002)第33号で指摘したように、Chomsky(1965)が指摘した曖昧な解釈を許す文(22)の不確定性と同じ様な問題を含んでいると思われる。<sup>7</sup>

(22) I had a book stolen,

- a. from my car when I stupidly left the window open.
- b. from his library by a professional thief who I hired to do the job.
- c. almost . . . but they caught me leaving the library with it.

(22)は後続する3つの脈絡により、「被害の受動」(間接受動)、「使役」,「行為の遂行」(完了相)を表している。従って、(22)は曖昧性を潜在的に持っている文であり構文上の不確定性を宿している文である。そしてこのhaveと類似した構文上の不確定性を作り出しているのが(1)と(2)のhebben構文である。しかし、オランダ語と英語には同様な不確定性があるといっても両者が同一の不確定性を持っているのではない。両者の明確な違いは、オランダ語のhebben不定詞構文は(22)のような「被害の受動」,「使役」,「行為の遂行」を意味することはなく、(1)は「不定詞の行為・行動の所在」, (2)は「不定詞の状態・事態の所有」を意味していると思わ

---

<sup>7</sup> Cf. N.Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*. (Cambridge, Mass.: MIT Press 1965) p.22

れる。<sup>8</sup> そこでこの点を確認すべく、このhebben構文の不確定性を追求しようと hebben の語義を改めて問い質してみてもそれほど有効な答えをみいだすことはできない。例えば前掲書 A.M.Fontein en A.Pescher-ter Meer (1994) のように「このふたつの構文の hebben に意味上の違いはない」という説明がみられるだけである。G.Geerts *et al.* (1984) では両者の hebben の語義については全く言及していない。<sup>9</sup> この hebben の語義の特定が困難なことから A.M.Duinhoven (1987) のように hebben を連辞動詞 (Koppelwerkwoord) と分類する説も提案されている。しかし、この特定し難い hebben の語義の問題は、A.Meillet (1912) が「文法化」(Grammaticalization) を規定した次の内容と「オランダ語辞典」WNT の記述を参考にしながら考えると比較的よく理解することができる。<sup>10</sup>

<sup>8</sup> オランダ語の使役構文は maken, laten を使って表現し主語の「働きかけ」の違いにより両者を使い分ける。英語の have 構文「サセル」(使役)に対応するオランダ語は laten 不定詞構文であることも laten 以外の動詞+定形節であることもある。しかし英語の「被害の受動(サレル)」に対応する不定詞構文はみあたらない。オランダ語の laten (又は maken) 不定詞構文には受動の解釈が可能でも能動形だけが生起し英語の have 構文が持つ「サセル」(使役)と「サレル」(被害)の潜在的曖昧性はない。もし主語にとって被害という好ましからざる事態を表す場合は、slechts node 'reluctantly' のような主語志向の副詞を使用する。次の例は R.W.Zandvoort, Van Heiden の文法書からの引用。

- i. a. They made him repeat everything the man had told him.
- b. Ze lieten hem alles herhalen wat de man hem verteld had.
- ii. a. I won't (can't) have you say such things.
- b. Ik wil niet hebben (toestaan) dat je zulke dingen zegt.
- iii. a. He would have the Government control all railways.
- b. Hij wilde dat de Regering het beheer over alle spoorwegen overnam.
- vi. a. I had the picture hung up in his room.
- b. Ik liet het schilderij in zijn kamer ophangen.

<sup>9</sup> op.cit.p.83. G.Geerts *et al.* (1984) には語義や語彙的特徴の記述はみられない。しかしこの不定詞構文を3つに分類している。op.cit.p12

<sup>10</sup> 文法化(Grammaticalization)に関しては、A.Meillet (1912) が草分け的な論文である。その後の展開に関しては A.C.Harris and L.Campbell, *Historical Syntax in cross-linguistic perspective*. (Cambridge: Cambridge Univ. Press 1995) を参照。WNT の記述については、拙論(2002) 同誌第33号 pp.140-141 参照。



L'affaiblissement du sens et l'affaiblissement de la forme des mots accessoires vont de pair; quant l'un et l'autre sont assez avancés, le mot accessoire peut finir par ne plus être qu'un élément privé de sens propre, joint à un mot principal pour en marquer le rôle grammatical. Le changement d'un mot en élément grammatical est accompli. 「補助的な語の意味と語形の弱化は相伴って生じる。このふたつの弱化がかなり進展すると最終的には補助的な語はそれ自身の固有の意味を消失しその文法的な機能を明示する主要語に付属・付加されてしまう。そしてひとつの語彙から文法的な要素（標識語）への変化が完了する」

In de meest verzwakte opvatting, t.w. waar *hebben* niet heel veel meer betekent dan juist even het tegenovergestelde van missen of ontberen, verstoken zijn, derhalve niet veel anders aanduidt, dan dat het object er voor het subject is, bestaat. 「最も弱い見方では、この hebben は、これと丁度（意味上）対比される「無い」又は「欠けている」、「存在しない」等とは異なる極めて多くの意味内容を持っている訳ではない。従って、主語があるときにそれに対する目的語があることを示す以外の内容を持っている訳ではない」

(1)と(2)の *hebben* は A.Meillet が指摘するような語形上の弱化を認めることはできないが間違いなく「所有」を原義とする文法化のプロセスの結果生じた意味上の弱化を認めることはできる。

これに対し WNT の記述は語義を正面に捉えた説明というより、その原義の逆である「欠落している、存在しない」を例示することによりそこに対比される内容の「在る、存在している」を暗示することで語義を示すという間接的な記述をしている。ここの *hebben* の語義の記述を読んでその意図する内容を即座に理解することは容易なことではない、

否、むしろ不可能であろう。これは、比較言語学の伝統的な *hebben* と *zijn* の捉え方を知って初めてその意図する内容を正しく理解できると思われる。このオランダ語辞典の語義の説明はまさしく印欧語学者 A. Meillet (1924) の文法化の説明や J. van Ginneken (1939) や É. Benveniste (1968) の *être* と *avoir* の歴史的変化の説明に依拠した記述に他ならない。この WNT の *hebben* の語義の説明は、É. Benveniste (1960) が「*avoir* と *être* は同じ資格の助動詞で表裏一体の関係にあり相補的關係にある」と述べた内容をそのままオランダ語の *hebben* と *zijn* に適用したものであり、二つの動詞の関係を  $NP_1 \text{ hebben } NP_2$  ( $NP_1 \text{ have } NP_2$ ) =  $NP_2 \text{ zijn aan } NP_1$  ( $NP_2 \text{ be at } NP_1$ ) として捉えているのである。しかしこの背景にある言語学的事情に精通していないとこの WNT が採用している間接証明法を理解することはできないであろう。この記述には *hebben* の語義は存在の *zijn* と同義であると曖昧に知る以外に読み取れる正確な内容は示されていないと言ってもよい。この間接証明法の歯切れの悪さは何よりももともと印欧祖語においては、所謂「所有」を表す動詞は存在しないと考えられるなかで、古典ギリシャ語やラテン語の「所有」表現を念頭におきつつ *zijn* に対峙する *hebben* の語義の記述をすることの困難さにある。この本質的な困難さの為に対立関係にある内容を例示して対語により語義を提示しようとし、いわば語義 A を説明するのに対立概念の語義 B を持ち込んだ説明法をしていることになる。しかし、印欧語歴史言語学の歴史的変化の予備知識の有無に関わらずこれだけでは十分な語義の説明にはならない。少なくとも語義 A と語義 B の間に  $\text{NonA} = \text{B}$  が成立し表現上二者択一で交替関係にあることを提示する必要がある。これが欠けているから歴史変化の予備知識があってもこの語義の説明には首肯し難い。ここでは A. Meillet の文法化の叙述を参考にして *hebben* は固有の語彙的な原義を消失し *zijn* に

対して二者択一の交替関係にある動詞と考えてみよう。<sup>11</sup> この考えは特に目新しいものではないが、この立場を採るA.M.Duinhoven(1985)に代表される統語論者はこの動詞が「所有」を意味するIk heb een zuster(I have a sister)のhebbenから意味内容を弱化し希薄化した分析的迂言形式の補助語へと立場を譲歩し主語と目的語を緩く結合する文法的標識語へ文法化を受けることによってこの構文自体が再分析されるに至っていると考えている。これは印欧諸語における完了時制の迂言形式に関する歴史的成立事情を考慮した伝統的な言語変化観に依拠した考え方である。

この考えでは(1)と(2)のhebbenは「在る」(zijn)とほぼ同義の動詞として扱われ、固有の意味を持っているというよりもはや文法化により文中の主動詞の地位を後続する不定詞に明渡す変化を被った定形要素(persoonsvorm)と考えられる。ここではD.Bickerton(1981)を援用してオランダ語の「所有」の具現化を考えてみよう。例えば二つの文法的項X,Yがあり両者は抽象的「所有・存在」関係があるとする。この関係を具現化するとき文の主語にどちらの項をたてるかによりhebben構文とzijn構文のいずれかを選択することになる。文法的項のXとYのどちらを主語にするかによりそれに応じてhebben構文zijn構文のふたつからいず

<sup>11</sup> 印欧諸語の「所有」を表す動詞に関してはA.MeilletやÉ. Benvenisteの論文の他に、E.Schwyzler, *Griechische Grammatik II*. (München: C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung 1934)p.150. W. Sidney Allen (1964). R. W. Langacker and Pamela Munro (1975). G.O.Curme, *A Grammar of the German language* (New York: Frederick Ungar Publishing Co.1970)p.496等を参照。更にこの「所有」の概念は抽象的なものとする考えは、John Lyons, *Semantics 2*. (Cambridge: Cambridge Univ. Press 1978)p.722-724. D. Bickerton, *Roots of language*. (Ann Arbor, Mich.: Karoma Publishers, INC. 1981)p.244を参照。D. Bickertonは、“z has x”の「所有」概念を不十分としながらも次のように規定している。“Possession,” is grossly inadequate for the semantics of *has*, which might better, though still inadequately, be defined as “stands in a close and superordinate relationship to.”

れかを選び出すことになる。従って、オランダ語の[XはYを所有する]という抽象的「所有」関係は次のような言語的具体化によって表現される。

- (23) a. X hebben Y 「XはYを所有している」 (possession)  
 b. Y zijn/vallen aan X 「YはXの所に在る」 (location) (述語として zijn と vallen の何れかが選択される)  
 c. Y zijn van X 「YはXの所有物である」 (ownership)  
 d. er zijn X 「Xが在る」 (existence) (述語が一項動詞の場合)

この選択肢は他の動詞をも考慮すれば更に増えるであろうが、hebbenと zijn/ vallenに限定しXが項Yが命題項という条件を満たしているのはaとbの選択肢だけである。そこで、J.Lyons(1977)と同じ様な考え方により hebben と zijn は共に Locative Verb の下位類を構成する動詞であり主語の項としてNPとSのいずれを立てるかにより決定される変異形と考えてみよう。このときのLocative Verbは類概念としての「所有」でその下位類の(23)a「所有」、(23)b「所在」、(23)c「所有物」、(23)d「存在」等は種概念と考えられる。この動詞 Locative Verb の「所有」は、種概念の「所有」、「所在」、「所有物」、「存在」を下位類としていることになる。

この類概念としての「所有」を導入することにより hebben (te) 構文の全体の用法をまとめて扱うことができる。前々号で考察してきた hebben 構文には hebben と te 不定詞の間に数量詞や否定要素を含むNP生起する2つのタイプ「存在を含意する構文」「権限・資格を含意する構文」があった。そして、前号で考察した hebben 構文は hebben と不定詞標識teが連続する構文でありその意味内容も統語的な振る舞いからも少なからず法助動詞的な性格を備える動詞であった。そして今回の付け加えた hebben 構文は不定詞標識 te 無しの構文である。従って、(23)aの具現形には4つの意味上微妙に異なる構文があることになる。これに迂言形完了時制を形成する hebben (ここでも zijn に対立する) 含めると5つ

の hebben 構文があることになる。

- (24) a. hebben + 標識付き不定詞, 「権限・資格」を表す  
 b. hebben + 標識付き不定詞, 「存在」を表す  
 c. hebben + 標識付き不定詞, (両者間に何も介在しない) 「話者と主語の意思の衝突」を表す  
 d. hebben + 標識無し不定詞, 未完了時制に限られ「状態」を表す  
 e. hebben + 完了分詞 (迂言的完了時制を形成)

この5つの中で, A.Meilletが指摘する固有の意味を消失し文法化により文法的な標識としての特徴を色濃くもっているのは(24)eであり順に(24)d, (24)c, (24)b, (24)aと固有の内在的語義を備えているのでなかいかわられる。この文法化による序列はP.J.Hopper and S.A.Thompson (1980) の他動性を構成するパラメータを基準にしても大方この序列と平行的な序列になるのではないかわられる。従って, A.Meilletが指摘した文法化を被った度合いを基準にすればオランダ語の hebben + 不定詞構文の hebben は, 迂言的完了時制を形成する(24)eの他に, 少なくとも(24)aから(24)dまでの4つがありそれぞれ微妙な構文上の意味を作り出す可能性を備えていることになる。この4つのいずれの構文が選択されるかは構文自体の特性もさることながらこれまでの議論で具体的に例証したように語用論的なレベルから要請される意味が加わって決定されることになる。

### 3 結びに代えて

これまで3回の連載の形でオランダ語の hebben 不定詞構文を考察してきた。その動機は現代英語にはなくなってしまったがフランス語にはある hebben 構文の統語的不確定性に着目しその意味的曖昧性を確認することであった。この構文は現代英語からは姿を消してしまった印欧諸

語の複合時制成立の問題と何らかの関わりを考慮すると、更に限りなく重要な課題との連動を想起させるものである。そして、A.Meilletの「ゲルマン諸語の複合時制はラテン語の強い影響下によりロマンス諸語から借用された表現形式である」とする見解よりも、É.Benvenisteの「ゲルマン諸語のhave, beによる複合表現はラテン語の影響による借用とするより、印欧諸語の全域にわたり既に歴史の初期において充分浸透した表現である」という見解に与するには更なる研鑽が必要である。

#### 参考文献一覧

- Allen, W. Sidney. Transitivity and possession. *Language* 40.3.337-343. 1964
- Behaghel, Otto. *Deutsche Syntax II. Die Wortklassen und Wortformen*. Heidelberg: Winter. 1924
- Benveniste, Émile. 'Être' et 'avoir' dans leurs fonctions linguistiques. *Bulletin de la Société de Linguistique* 60.1.113-34 1960. Repr. *Problèmes de linguistique générale I*. Paris : Gallimard. 187-207 1966. 岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』東京：みすず書房 1983.
- Benveniste, Émile. Les transformations des catégories linguistiques. 1968. Repr. *Problèmes de linguistique générale II*. Paris : Gallimard. 126-136 1974.
- Bickerton, Derek. *Roots of Language*. Ann Arbor, Mich.: Karoma Publishers, INC. 1981.
- Boon, Pieter. Die Verwendung der "accusativus cum infinitivo" — Konstruktion in anderen Sprachen bzw. ... *Indogermanische Forschungen* 85. 227-245. 1980
- Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press. 1965
- Collitz, Hermann. *Das schwache Präteritum und seine Vorgeschichte*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 1912
- Cook, Kevin. *Dubbel Dutch Praktische handeling voor anderstaligen die Nederlands leren, met vele voorbeelden en vergelijkingen*. Groningen: Boek Werk 1995
- Curme, G.O. *A grammar of the German language*. New York: Frederick Ungar Publishing Co. 1970.
- Declerck, Renaard. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha

1991.

Drosdowski, Gunther. *Duden Grammatik der deutschen Gegenwartssprache* 4. Mannheim: Dudenverlag 1984.

Droste, Frederik Gerrit. *Moeten: een structureel semantische studie*. Groningen: J.B.Wolters 1956

Duinhoven, A.M. De deelwoorden vroeger en nu. *Voortgang, Jaarboek voor de Nederlandistiek VI* (Vrije Universiteit Amsterdam. Faculteit der Letteren studierichting Nederlands) 97-138 1985.

Duinhoven, A.M. Hebben een koppelwerkwoord? *Forum der Letteren* 28. 79-82 1987.

Duinhoven, A.M. Dat siet men wit ende reine wesen. A.c.i.-constructie in het Nederlands. *De nieuwe taalgids* 84-5. 409-430 1991.

Van Es, G.A., and P.P.J. van Caspel. *Publicaties van het archief voor de nederlandse syntaxis*. nr. 39, 42 (Rijksuniversiteit te Groningen) 1974

Fontein, A.M. en A. Pescher-ter Meer, *Nederlandse Grammatica voor Anderstaligen*. Utrecht: Nederlands Centrum Buitenlanders 1994.

Franck, Johannes. *Etymologisch woordenboek der nederlandse taal*. Tweede Druk. door Nicolaas van Wijk. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff 1949

Van Ginneken, Jacques. Avoir et être (du point de vue de la linguistique générale). In *Mélanges de Linguistique, offerts à Charles Bally*. Genève: Georg et Cie. 83-92. 1939

Geerts, G., W.Haeseryn, J. de Rooij, en M.C.van den Toorn. *Algemene Nederlandse Spraakkunst*. Groningen: Wolters-Noordhoff 1984.

Geerts, G. en H. Heestermans. *Van Dale Groot Woordenboek der Nederlandse Taal*. Elfde, herziene druk. Utrecht: Van Dale Lexicografie 1984

Van Helden, J.J. *A Concise English Grammar*. Second Edition Amsterdam: J.M.Meulenhoff 1953.

Harris, Alice C. and Lyle Campbell. *Historical syntax in cross-linguistic perspective*. Cambridge: Cambridge University Press 1995.

Helbig, Gerhard/ Joachim Buscha. *Deutsche Grammatik, Ein Handbuch für den Ausländerunterricht.2 unveränderte Auflage*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie 1974.

- Hoekstra, Teun. Small clause result. *Lingua* 74. 101-139.1988
- Hoekstra, Teun, Monica Lansu en Marion Westerduin. Complexe verba. *Glott* 10. 61-78.1988
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56.2.251-299. 1980
- Kenji Inomata. Secondary predicates in Dutch. *Bulletin of The Japan-Netherlands Institute* 16.2 39-57. 1992
- Kenji Inomata. The Syntactic Indeterminacy of a *hebben* + infinitive construction 1. *Daito Bunka Review* 33. 111-141.2002
- Kenji Inomata. The Syntactic Indeterminacy of a *hebben* + infinitive construction 2. *Daito Bunka Review* 34.41-59.2003
- Kraak, A. en W.G. Klooster. *Syntaxis*. Tweede Druk. Culemborg: Stam-Robijns 1972
- Lambrecht, Knud. There was a farmer had a dog: Syntactic amalgams revisited. *BLS*.14. 319-339.1988
- Langacker, Ronald W. and Pamela Munro. passives and their meaning. *Language*. 51.4.789-830.1975
- Lehmann, Winfred P. *A Gothic Etymological Dictionary*. Based on the third edition of *Vergleichende Wörterbuch der Gotischen Sprache* by Sigmund Feist. Leiden: Brill 1986.
- Van Loey, A. *Schönfeld's Historische Grammatica van het Nederlands*. Achtste druk. Zutphen: W.J.Thieme & Cie 1970.
- Van Loey, A. *middel nederlandse spraakkunst. I vormleer*. Zevende verbeterde druk. Groningen: H.D. Tjeenk Willink 1973.
- Lyons, John. *Semantics* 2. Cambridge: Cambridge University Press 1977.
- Martin, W. en G.A.J. Tops. *Van Dale Groot woordenboek Nederlands-Engles*. Utrecht: Van Dale Lexicografie 1986.
- Meillet, Antoine. Le développement du verbe *avoir*. *Antidôron Festschrift Jacob Wackernagel zur Volledung des 70. Lebensjahres*. Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht 1924.
- Meillet, Antoine. L'évolution des formes grammaticales. *Scientia* 1912.12.26.6. Repr in *Linguistique historique et linguistique générale*. Paris: Librairie honoré champion. 1965.



- Meillet, Antoine. *Caractères généraux des langues germaniques*. Paris : Hachette 1947.
- Paardekooper, P.C. *Beknopte ABN-Syntaxis*. Vijfde druk. Eindhoven: in eigen beheer 1978.
- Paardekooper, P.C. *Beknopte ABN-Syntaxis*. Zevende druk, sterk uitgebreid. Eindhoven: in eigen beheer 1986.
- Paul, Herman. *Deutsches Wörterbuch*. 6 Auflage. Tübingen: Max Niemeyer 1966.
- Porzig, Walter. *Die Gliederung des indogermanischen Sprachgebiets*. Heidelberg: Winter 1954.
- Scheurweghs, Gustave. *Present-Day English Syntax, A Survey of Sentence Patterns*. London: Longman 1959
- Schwyzer, Edward. *Griechische Grammatik II*. München: C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung. 1934
- Van Sterkenburg, P.G.J. en W.J.J.Pijnenburg. *Van Dale Groot Woordenboek van hedendaags Nederlands* 1984.
- Stoett, F.A. *nederlandsche spreekwoorden, spreekwijzen uitdrukkingen en gezegden*. Derde druk. Zutphen: W.J. Thieme & Cie 1915.
- Verwijs, Eelco and Jacob Verdam. *Middelnederlandsch Woordenboek*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff 1885-1952.
- Vincent, Nigel. The development of the auxiliaries HABERE and ESSE in Romance. In Nigel Vincent and Martin Harris (eds.), *Studies in the Romance verbs*, 71-96. London: Croom Helm. 1982.
- De Vries, Jan. *nederlandse etymologisch woordenboek*. Vierde Druk. Leiden: Brill 1997.
- WNT. *Woordenboek der Nederlandsche taal*. 's-Gravenhage enz. 1882-.
- Weijnen, A.A. *Schets van de geschiedenis van de nederlandse syntaxis*. Assen: Van Gorcum & Comp.N.V. 1971.
- Zorn, Klaus. Semantisch-syntaktische Beobachtungen an den Fügungen "haben + zu + Infinitiv" und "sein + zu + infinitiv". *Deutsch als Fremdsprache* 14. 142-147.1977
- Zandvoort, R.W. *A Handbook of English Grammar*. 13th. Ed. Groningen: Wolters-Noordhoff 1974.
- (『英文学論叢』第33号(2002), 第34号(2003)の参考文献をも含む)